戦後74年
あの空を忘れない

終戦から今年で74年。戦争経験者は減少の一途をたどり、戦後に生まれた人は、町人口の８割を上回りました。

町にも戦争の爪痕が残っています。あなたは知っていますか。終戦８カ月前の1944年12月、当時、神代村東和田の山林にアメリカの大型爆撃機B29が墜落したこと。その53年後の1997年９月に墜落した元機長が町を訪れたこと。

新しい時代を迎えたいま、戦争の惨禍を知り、平和について考えます。

１９４５年（昭和20年）８月15日、日本は終戦を迎えました。その９日前に広島、６日前には長崎に原子爆弾が投下され、少なくとも広島だけで14万人以上が命を落としました。終戦の１カ月前の７月19日には、銚子が空襲され、市内は火の海と化しました。この日を含め、銚子では３回の空襲がありました。東京大空襲で余った焼夷弾や爆弾を帰りがけに銚子に落としていったとも言われています。

東庄町史によると、当時笹川町や神代村にも被害があったことが記されています。

『昭和17年４月18日
　笹川上空に敵機襲来あり
昭和19年５月６日
　空襲熾烈
昭和19年12月３日
　神代村にB29墜落す
昭和20年１月31日
　空襲ほとんど毎日なり
昭和20年７月４日
　P51機銃掃射、笹川駅および入正醤油工場銃撃される
　笹川駅の銃撃で女性一人が犠牲』

また、戦争のため、国外に兵士として出ていた人々は、なかなか故郷に帰ってくることはできませんでした。左表は終戦後１年たった昭和21年８月の時点でどれだけの人が帰ってきていないか、その後どのような結果だったかを示した東城村役場の資料です。東城村だけで３００人以上が動員され、町全体としては、かなりの数になることが推測されます。

昭和21年８月以降の東城村の復員軍人

	昭和21年～22年に結果が判ったもの		昭和23年～24年に結果が判ったもの		不明
昭和21年8月未還者数 陸海軍 合計90人	復　員	戦死公報	復　員	戦死公報	
	21	29	16	10	14

東城村における各方面別の復員軍人

	国内	国外									合計
昭和21年8月	内地	満州	南鮮	台湾	支那	ニューギニア	仏印	ラバウル	小笠原	ハルマヘラ	
	213	1	1	2	83	1	4	2	7	9	323

（国名等は当時の資料による）

※復員…軍務を解かれた兵が帰郷すること

Interview

みんなで助け合っていた

菅谷（すがや）　求（もとむ）さん（昭和３年生まれ）東和田

終戦当時、17歳だった菅谷さんに戦時中のこと、Ｂ29墜落時のことを伺いました。

学校でも戦時色を学ぶ

戦時中、学校でも軍の影響を受けました。音楽から唱歌が消えて、代わりに「愛国行進曲」のような軍歌調の曲を歌ったり、集団訓練や手旗信号などを学んだりしました。学校の区分も今とは違い、国民学校初等科（現在の小学校）が6年、高等科（現在の中学校）が2年の義務教育でした。

家では毎日、朝仕事を行っていました。主に、雑巾がけや庭掃きの掃除と、飼っていた牛やヤギの世話などです。夏休みには、稲を束ねる縄をわらで作りました。

農業もみんなで助け合い、そこで協同作業が生まれました。田植えの時期には、学校も2週間ほどの休みになり、みな総出で行いました。その間に2回の「虫取り」の奉仕作業を行いました。苗代で、苗の葉に産み付けた害虫の卵や蛾の駆除をする「虫取り」で、無農薬で米作りを行いました。

▲当時は着物に風呂敷で登校していた（神代国民学校）

軍事教練と勤労奉仕

私は神代国民学校を卒業後、家業に従事するため、農業などを手伝いながら、神代青年学校で週に一度学んでいました。学校とは言っても、軍事教練がほとんどで、学科の勉強は少しでした。当時から私学の塾があり、そちらで学ぶことができました。

また、軍の命により勤労奉仕に、昼夜問わず参加しました。あるときには香取航空基地（現旭市）の土木作業に、またあるときには用材となる松杉を伐採し、製材所へ運び、さらには濠（ごう）やトンネル堀りにも携わりました。

あの日 西の空で光った

サイレンは毎日のように鳴り、ラジオでも敵機襲来の情報が流れ、半鐘も鳴りました。そして12月3日、神代青年学校で軍事教練中に一機のＢ29が墜落したのです。

空襲警報が鳴り、はるか西の空からＢ29十数機の編隊が小さく見えました。近づくにつれ、その中の一機が光を放ち編隊を離れ、火を吹き高度が下がり始め、向かってくるのが分かりました。白い落下傘（パラシュート）がたくさん開き、敵機は猛火に包まれ頭上に接近。大音響とともにＢ29は空中分解し、大きな主翼の片方が猛火に包まれ、木の葉のように落下するのが見えました。さらに、上空では日本の戦闘機も飛び交い、別の落下傘が2つ3つと家の方角へ向かい、家族の無事を案じました。

村長の指揮で警察や警防団など警防組織を整え、慌ただしく動きました。やがて役場前には、捕虜の米兵が集められ、中には大やけどを負い痛がっている人もいました。

短い師走の午後がなぜか長く感じました。北へ流れた落下傘兵が気がかりで自転車で飛ぶように帰宅し、無事を確認すると安堵しました。

翌日、友人と機体の主要部が落ちた山腹へ行くと、そこは目を覆う悲惨な状態でした。全ての物体が焼けただれくすぶり続き、土砂と残骸等が入り混じっていました。米兵の遺体は原形をとどめていません。部品も多くあり、足場がつるつるして下を見ると、不発弾の上でした。急いでその場を立ち去りました。

▲墜落したB29を片付ける人たち